養護学級の進路指導について

加田紀機・足立克洋・三島修治・糸賀真由美

Ⅰ　は　じ　め　に

本校の特殊学級（知的障害児対象）が昭和40年に設置されて以来、101名の卒業生を出している。その間の進路先を見ると、町工場に就職して、その勤勉さを認められて信頼を勝ち得て頑張っている者、転職をしても頑張っている者、転職を繰り返して挫折した者、自立を目指して施設や病院に入った者、在宅で自立を目指している者、中にはイギリスで菓子職人として頑張っている者など卒業生の進路は様々である。

その進路も本校特殊学級創設期と20年たった現在とでは大きな変化が見られる。創設期にはほとんど大半の卒業生が何等かの形で就職をしていたが、ここ数年来は施設に行く者が多くなっている。これは昨今の社会情勢（特に卒業生の多くを吸収してきていた製造業分野での構造変化で急激な省力化が進んできている）で求人が減ってきていることにもよるが、最大の要因はここ数年来の在校生の障害が重度化してきていることである。

従って本校の進路指導も障害の多様化、重度化に対応させるよう努力してきた。

Ⅱ　進路指導に関する基本的な考え方

健常児の教育では指導要領に基づく一定の指導内容が最初に決められるが、特殊教育の場合、個々の生徒の実態や教官の技量、施設設備等に応じて指導内容が決まってくる。61年度は専任教官４名、１年男４、女２、２年、男５、女２、３年女３、生徒合計16名でスタートした。

1.　生徒の実態（昭和61年度）

表 1.　知能指数別生徒数

学年10	39以下	40～49	50～59	60～69	70～79	80以上	合計
1	5 (内推定1)	0	1	0	0	0	6
2	4	2	1	0	0	0	7
3	3 (内推定1)	0	0	0	0	0	3
合計	12	2	2	0	0	0	16

表 2.　主な障害別生徒数

障害名	1年	2年	3年	合計	備考
ダウン氏症候群	3	2	1	5	女子２名
水頭症	0	1	0	1	
聴覚障害	0	2	0	2	難聴(女子１名)
言語障害	1	1	2	4	吃音、構音障害３、緘黙１
心臓疾患	1	0	1	2	手術済み
自閉的傾向	2	2	0	4	男子３、女子１
抗テンカン剤服用中	0	0	1	1	

生徒16名中、登下校の要介助者１名を含め在校生の能力差は大きい。松江市内の国公立合わせた９校の中でも比較的障害が重い方である。市内特殊学級の各種合同運動関係行事の成績を見ると一目瞭然で、ここ数年下位で低迷している。

2. 基本的な指導方針

島根県では高等学校が整備され、健常児の進学率が100%に近いのに比べ、知恵遅れ対象の高等部の定員は極端に少なく、全県下で20名しかいない。このような状況なので義務教育の最後の3年間である中学校では進路の選択が大きな課題の1つになっている。従来のように現実社会を想定し、どんどんと追い込むような指導(例えば作業学習や職場実習)もしているが、障害の重い生徒の場合、生徒一人ひとりがそのもてる力を自分から十分生かせるような鍛え方(自ら学ぶ力の習得)の方が、長い目で見たとき、より効果的との考え方に立ち、日々の指導の積み重ねを大切にしている。このような基本的な考え方で本校の生徒の実態を踏まえ、

① 情緒の安定をはかる
② 健康な体力の維持増進をはかる
③ 集団への適応をはかる
④ 身辺自立を中心に個に応じた自主性を育てる学習
⑤ 家庭との連携を密に保つ

これら5つを基盤に教育課程を編成し、指導している。

①の情緒の安定は学校生活の基本的な条件で、総ての学習の出発点と考えている。情緒の安定などは直接指導できるものではないが学校生活全般を通して、生徒が安心して学習できる場、適切な学習集団の編制、みんなから認められる場、個々の発達に応じて自主的に何かをしようとする場作りに重点をおいている。

②について、健康な体力を維持には適度の運動は不可欠であるにもかかわらず社会全体があまり体力を使わないような仕組みになっているうえ、障害を持っているということで更に体を動かさない傾向がある。健康は人生の財産である。そこで年間を通じて校外学習やスイミングスクールなどあらゆる機会を捉えて体を鍛えるように心がけている。

③の集団への適応に関して、本来人間は他人との関わりの中で本当に育つと言われている。本校でも普通学級併設の特殊学級の特徴を出来るだけ生かし、小集団の中で対人関係を重視した指導が大切であると考えている。個人指導も必要に応じて、集団学習への過程として大切にしている。

④個に応じた学習について、出来るだけ具体的で分かり易い授業。自分の事はできるだけ自分で解決出来るような授業、学習の定着化のため繰り返しの指導を基本としている。授業が分かれば自然に意欲が湧き、自主性も育つはずである。そのためには徹底した生徒理解と、教材研究が必要である。

⑤家庭との連携について、学校では日々の連絡帳、学級だより、全学年だより、週刊の養護学級だより「ひまわり」の配布等を通して学級行事への参加を積極的に呼びかけている。家庭と学校のビデオ情報の交換(家庭の要望があれば学校の学習状況を撮ったテープのコピーもしている)また手軽な電話等でも連絡が密になるよう努力しているが、学習効果をあげ、それが定着するためには単に教師、生徒間だけのやりとりだけでは不十分である。広く社会で、とりわけ家庭内での関わりは学習を深めたり、次への強い意欲づけになる。そのため、家庭との連携は特に大切にしている。

Ⅲ　進路指導の実践例

日々のきめ細かい指導の積み重ねが将来の進路決定に大いに関係してくるが、本稿では各学年毎に今年度の実践で、進路指導に深い関わりのあるものの中から特徴のあるものについて述べる。

1.　1年生の取り組み

(1)　学級の係活動において

自分達の学級生活をよりよいものにするためには、学級のみんなが自分に出来ることを分担し、その仕事をきちんと続けることが大切である。仕事の内容が難しかったり、一人では続けてやっていけそうにないような係については、上級生の助けを借りて一緒に活動を重ねていくようにしている。現在、取り組ませている係の仕事には次のようなものがある。

・新聞受けから購読の新聞を毎日取ってくる。・次の日の学習予定を板書する。・花壇や植木鉢に水をやる。・鶏に餌と水をやる。・学級図書の整理をする。・制服、体操服、作業服の着替えの点検をする。・学級通信や学習週予定表などを掲示する。・爪、ハンカチ、チリ紙、歯磨きなどの衛生検査をする。・朝、湯を沸かしてポットに入れる。・トレーニング時に用具などを準備したり、片付けたりする。・昼食用湯呑みを運んで配ったり、洗ったりする。・昼食用のお茶を準備したり、片付けたりする。・日直日誌をつけ、戸締りをする。

この様な係活動を毎日進めながら、週末に学級会を設け、みんなの行動を反省したり、各係の取り組みを発表したりし、またよい点をみんなでほめ合ったりしている。

(2)　作業的学習

学校での作業的学習として、畑での野菜作り（ジャガイモ、キュウリ、ナス、ピーマン、トマト、さつまいも、大根、カブ、ねぎなど）や、活版印刷作業（映画会員証や年賀状）、セメントブロックの製造、木工（畑、花壇の表示板や草取り用具など）、調理（炊飯、味噌汁、カレーライス、サラダ、バーベキュー、おでんなど）、カレンダー作り、文集作りなどをとり入れている。これらの作業的学習を繰り返し積み重ねていき、見通しをもって行動する力や、作業における忍耐力、それぞれの作業能力の向上を大きな目標とし、上級生と共に、時には小グループ化して活動をおこなっている。

1年生においては、これらの作業に対して未経験な事が多く、その体験も希少である。細かな作業動作よりも、まずは、それぞれの作業内容に対する興味、関心を持たせ、作業的な場の雰囲気に慣れさせ、体を動かし活動することの楽しみ・喜びを味わわせていくことを大切にした。

実際の作業場面で次のような姿がしばしば見られた。畑の土を起こし畝を作る時に、K男、T男はスコップで畑の1ケ所を掘り下げ、大穴を掘ることに専念し大喜びした。セメントブロックの製造作業中に、K男は作業場を離れ、畑やグランドの方を所せましとネコ車を押し回って、しばらく帰ってこなかったが、ネコ車の操作はうまくなった。

作業においては、その中で必要な道具をまず手にしてみて、用具の使用に慣れていき、作業の雰囲気を肌で感じ取ることが必要である。K男やT男のような遊び的動きも、作業の初歩的段階では大事なことで、このような動きを重ねることによって、少しずつ作業の目的的動作につなげていった。

(3)　職場見学

2、3年生が各学期に1週間ずつ市内の職場に出かけ実習を行っている、この機会を捉え、1年生

は実際に定期バスなどの交通機関を利用したり、歩いたりして、みんなで上級生の職場実習先に出かけて行く。そして職場の場所を知り、先輩の働いている様子やその職場の様子などを直接見たり、時には簡単な作業を一緒に少しだけやらせてもらったりする。この様な体験を通して、職場実習の実際を理解し、2年生から始まる自分達の実習に対する心構えを育てる場ともしている。

(4) 家庭での手伝い

学校での係活動と同様に、各家庭においても生徒が出来そうな仕事もたくさんある。生徒に出来るだけ手伝いをするように話し、毎日提出する日記の中にその内容を書くように指導している。そして時々学級集会で、家での手伝いの様子を発表させたり、みんなでほめたりして意欲を盛り上げるよう努めている。夏休みや冬休みにも毎日何か手伝いをし、休み明けに学級会で休み中の生活コンクールを行い、よく手伝いをした生徒に賞を与えて、みんなが仕事に関心を持つように仕向けている。連絡帳などで、各家庭の保護者に、手伝いをあたたかく見守り、毎日続けるように励ましていただくように協力をお願いしている。

生徒が家で行っている手伝いには次のようなものがある。

・玄関や部屋の掃除　・ごみ捨て　・風呂掃除、水入れ　・玄関灯や門灯の点灯　・戸締り　・食器運び、食器洗い　・洗濯、洗濯物干し、取入れ、たたむ　・靴の整頓　・犬の散歩、餌やり　・牛乳とり　・新聞とり　・留守番　・保育所に弟を迎えに行く　・買物の荷物運び等である。

この様に自分の出来る仕事を毎日一つずつでもやることにより、各家庭において、家の人に喜んでもらい、家族の一員としての気持ちも育ち、その仕事ぶりを認めてもらうことで、自分のやってきた仕事にも自信を持ち始めてきている。家庭との連絡を密にし、手伝いの量や質を広げていくことは、将来の職業的生活や家庭生活をより豊かに確かにしていく大切な一面である。

2. 2年生の取り組み

～単元「広島修学旅行」～

(1) テーマ「働く人」設定の理由

本校特殊学級に於て実施している週1回の校外学習は、生徒達にとって、様々な情報を得る場となっている。そこで得た情報が学習の中で大きく取り上げられることも多い。目的地までの過程において見かけるいろいろな働く人たちの姿もその1つであるが、生徒達は殆ど関心を示さず見過ごしている場合が多い。従って自分達の身近なところでどんな仕事があり、どの様な働く人がいるのか、興味・関心を高めると同時に普段見る事のない仕事などにも目を向けさせ職業への関心を高める事は、自分の進路を考えさせるのに大変重要である。本年度の修学旅行はその様な考えから、テーマ「働く人」を設定し、生徒達が持っている職業への見方を広げようとしたものである。

(2) 指導の実際（テーマに関わるもの）

① 事前学習（昭和61年7月18日～10月6日）

・事前練習校外学習（9月30日）松江から出雲（国鉄、私鉄電車往復）

実際に国鉄私鉄を利用して、その利用の仕方についての実態を把握すると同時になれることが大きなねらいである。今年度は、その他にどんな人たちが働いているのかを注目させようとした。生徒達は、乗り物の珍しさに気を取られ周囲の働く人への関心は低かったので、

駅員さんや車掌さん、運転手さんの存在を指摘した。

・見学地の学習

各見学地のパンフレット、地図を見ながらイメージをつかませた。時にはビデオ、写真等の資料も利用した。各見学先や乗り物の中で働く人の様子をどの様な視点でみるか指導した。その際に、生徒の五感を利用して確認できるという観点から次のように設定した。

どんな仕事をしておられましたか。
どんな服装をしておられましたか。
どんな臭いがしていましたか。
明るさはどうでしたか。
男の人、女の人とどちらが多かったですか。
働いてみたいですか。（どんなことをしたいですか）

② 修学旅行（広島２泊３日）本番でみた働く人

普段見ることのできない自動車工場、新幹線、遊園地、水族館、平和資料館、またホテル宿泊と、生徒は２泊３日の広島修学旅行を楽しみながら終えることが出来た。見学地や、車中で見た働く人たちの様子について、生徒はそれぞれの見方で捉えていた。旅行中に得た情報は、出来るだけＶＴＲ等に記録し、事後学習で使えるようにした。また、生徒が疑問に感じた点についてはその場で質問させて納得するようにした。例えば、ホテルの夕食時にＩ･Ｍ子は女子従業員が和服から洋服へ着替えたのを見て不思議に思い、なぜかと質問してきた。すぐに、従業員の方へ直接質問させ、片付けのときには和服より洋服の方が仕事がし易いことを教えてもらった。学校での作業時にも服装について指導しているが、改めて機能性について確認させる場となった。

働く人についての観察の視点に基づいてホテルで夕食時に記録させた。

（Ｈ・Ｔ男の記録参照）

③ 事後学習

・修学旅行報告会

旅行の様子や感想を旅行に行かなかった１、３年生や保護者の方々に報告する場を設けた。旅行中の楽しい場面などのＶＴＲを放映したり、見学地で見た印象的な場面を扮装したり、模型などを使って舞台で再現して参加者の方々に発表した。働く人について印象に残ったことは次の様であった。

○Ｋ・Ｓ男……工場の説明係、運転手
○Ｓ・Ｍ男……マツダ工場の組立の仕事
○Ｓ・Ｎ男……工場の説明係
○Ｙ・Ｊ男……マツダ工場の組立の仕事
○Ｉ・Ｍ子……マツダの受付の女の人
○Ｓ・Ｒ子……マツダの受付の女の人
○Ｈ・Ｔ男……ホテルのおじさん

（生徒全員が旅行前には発表していない内容を発表した。）

修学旅行の学習を終えて次に「私と仕事」という単元で仕事に対する見方を深めていこうとした。その学習の中で、私のやりたい仕事を発表させた時、２年生は修学旅行でみた仕事を上げていた。

Ｉ・Ｍ子は受付の女の人になりたいと、みんなの前で、見た時の様子を発表した。その時、「電話はこんなふうに持っていた。」と指先まできちんと揃えていた。彼女は受付の仕事の意味はまだ十分に理解してはいないが、自分のやりたい仕事に対して関心を持ち細かい所まで観察していた。修学旅行の学習だけで自分を客観的に見つめる力、物の見方を深める力が育つわけではないが、今回の旅行で少なくとも普段、目に留まらなかったことに目が向いたことは確かである。毎日の生活の中にも一人ひとりの生徒にその様な力を育てる場を設定していかねばならないと考えている。

「私と仕事」という単元の学習や修学旅行報告会の学習を通して生徒の発表から、仕事や働く人への興味、関心を深めることが出来たといえる。今後、ここの生徒に対して、自己のもつ力とやりたい仕事を客観的に捉える力を養い自分の進路に就いて考える場を設定していきたい。

はたらくひとのようす　　広島修学旅行　　10月7日～8日

	どんな仕事をしておられましたか。	どんな服装をしておられましたか。	においはどうでしたか。	明るさはどうでしたか。	男の人と女の人でどちらが多かったですか。	働いてみたいですか。どんなことをしたいですか。
マツダ自動車工場	瀬戸さんのせつめい男の人が車を工場で作っておられました。	男の人が作業着、女の人が赤い服と白いカッターと黒いくつ受付の女の人	いろのにおい	工場の中より明るかった。	男の人が多かったです。	は い（作る仕事）
ホテルあいおい	おばさんが食事のおてつだいをしました。	女の人がきものをきています。	フライとしょうゆ	でんとう	女の人が多かったです。	は い（ごはん）
厳島神社	おじさんがおられました。		海の水みどり		男の人が多かったです。	は い（　　）いいえ
水族館	おばさんがおられました。	女の人がようふくをきています。	さかな		女の人が多かったです。	は い（　　）いいえ
ナタリー遊・園地	おじさんとおばさんがおられました。	おじさんとおばさんがようふくをきています。		おばけ	男の人と女の人	は い（　　）いいえ
平和公園	おじさんとおばさんがおられました。	おじさんがネクタイをきています。		でんとう（資料館の中）	男の人と女の人	は い（　　）いいえ
のりもの やくも号 ひかり号 バス 電車 船	電車の中でおじさんがおられました。	おじさんがネクタイをきています。		でんとう	男の人が多かったです。	は い（　　）いいえ

（Ｈ・Ｔ男の記録）

3.　3年生の取り組み

1、2年の指導を受けて、3年では一人ひとりの生徒の進路を具体的に考えながら指導してきた。本稿では、一人の生徒（Ｎ・Ｎ子）の指導と変容について述べる。

(1)　職場実習

本校の職場実習は作業学習にも積極性の出てきた2年生から開始している。2年生の1学期は通所授産施設若草園。2、3学期は特別養護老人ホームで実習をした。若草園では、張り切って割箸の袋入れやしおり折り、菓子箱の仕切り組みの作業をした。実習を終えて自宅につくとすぐに寝るようだったが、職場からは「最後まで頑張った。仕事が終ったことが報告できた」とほめていただいた。特

別養護老人ホーム長命園では、「言われたことは最後までがんばった。返事もきちんと出来るし、仕事を安心して任せられる。」という評価をもらった。

3年生では、1学期は福田屋という菓子製造工場、2学期は湖畔茶屋という料理店で実習した。菓子工場では菓子の袋、箱詰めやシール張り等、じっと立ってする単調な仕事で、本人も余りいい印象を受けなかったようである。料理店では、自分で様子を見ながら団体客の食事の準備、片付けが出来、「何事も自分から進んで良く働いた」とほめていただいた。

いろいろな職場へ実習に行き、実習自体にも慣れていったが、その中から自分の好きな仕事とか自分にあった仕事を、「もう一度してみたい実習は何か、次にやりたい職場はどこか」という発問で考えさせた。すると「長命園、人のお世話」との答えが返ってきた。教師の側も、彼女は、じっとして同じ事を繰り返しコツコツやる仕事よりも、周囲に気を配り、体を動かしながら出来る仕事の方がいいと考えていたので、自分の適、不適等の判断力の確かさを知ったのである。

(2) その他の学習の場面

1学期は、学活等を利用して、職場実習を中心に好きな、もう一度やりたい仕事を考えさせた。2学期はもう少し広い視野で将来の仕事を考えさせるようにした。特に「私と仕事」という単元では、修学旅行でいろいろな仕事を見て来た2年生と一緒に、やりたい仕事を考えた。そうすると、小学校の体育の先生がしたいという意見が出た。もともと体を動かすことは好きだが、近くの小学校や附小、附中の体育の先生の様子を見て憧れを持ったようである。

先生という希望が出たので、先生をするには、何が必要か考えさせ、国語や算数の勉強をし、漢字を使うなど、本人が、目標とすることが出てきた。一方、先生になるには、大学で勉強もしなければいけないことなどは説明しておいた。国語と算数、漢字の勉強は、毎日のドリルや日記の指導の中で継続して行っている。

(3) 生徒（N・N子）の実態

昭和46年4月27日生まれ、女性、単純精薄。8才の時、心房中核欠損症の手術を受け、完治している。この手術を受けるまでは、指先も良く動かなかったそうであるが、術後は体が丈夫になったとのことである。発音が幼児語のようで、拗音なども出にくい、いわゆる構音障害がある。

中学校2年の5月、島根心身障害者職業センターで諸検査を受けているが、コース立方体組合せテストでＩＱ66、心身障害児童生徒性格診断検査（ＰＩＨ）では、不慣れな場面や大きな集団の中では萎縮しがちであるが、自己中心性や固執性はみられず、情緒的に安定しているとの結果が出ている。学校生活でも情緒は比較的安定している。

入学してしばらくは同級生のＦ・Ｍ子とＮ・Ｋ子との対立に巻き込まれ、自分の気持ちをどう表現していいのか分からないもどかしさから、床に伏しておいおい泣くことが二度三度あったが、すぐに安定してきた。

作業学習は、畑作業・印刷など一通り経験した1年生の後半ころから、指示されたことは積極的にするようになった。

2年生になり下級生も入ってくると、自信のあること、自分が知っていることは、下級生に教える場面が見られ、言葉も出てきた。しかし、まだ、新しいことに対して消極的であった。

3年生になると、最上級生という自覚も出て、集団の中でも友達の面倒をよくみたり、自分の気持ちを抑えて行動出来るようになった。細かいところに気がつき、用事を頼まれても、気が付けばその用事もついでにやってのけるようになってきた。そういう機会をとらえて、みんなの前で褒めてやると本人もやりがいをもって頑張るようになった。また、褒めたついでにもう少し努力すること等を指摘してやると、普段いやがっていた事にも挑戦するようになった。

こうした学校生活での成長の反面、家庭では言われても何も手伝わず、自分の部屋に1人でこもってテレビを見たりしていることもあったので、お手伝い表を作って、家庭での手伝いを奨励したり、今日はこれをしようという目当てを持たせて家へ帰すようにした。言われたことはするが、まだ自分から積極的にするまでには至っていない。

高等部の就学相談（2学期中旬）を機に、ドリル類や日記の漢字等に意欲が出始めた。また学校で始めた「附中食堂」の味噌汁作りにも意欲的に取り組み、その自信で家庭でも自分から手伝いを申し出たり、体操服の洗濯を自主的にするような場面も出てきた。

保護者の願いはともあれN・N子の高等部願望は強く、彼女にとってはそれが負担にならず、逆にその事が学校や、家庭生活の張りになっていたようである。

合格発表を自分で電話で聞いて、みんなからお祝いの言葉をもらって感激の余り涙が大いに出た。

Ⅳ 考　　察

今年の実践を通して次のような事が問題点として挙げられた。

1. 生徒への意欲づけ
2. 経験領域の拡大（学校や家庭、職場実習先の開拓等）
3. 学習の反復
4. 集団と個のバランスのとれた教育課程の編成
5. 校内における特殊教育の位置づけ
6. 家庭や地域社会との連携
7. 進学希望者数にリンクした高等部定員の確保、卒業生の実態に即した進路先の保障

以上を次年度の重点的な研究課題として進路指導に取り組みたい。

表3. 過去6年間の進路状況

卒業年次		昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年	昭和62年	総　計
進路	就職	1人（50%）	0人（ 0%）	1人（17%）	1人（20%）	1人（25%）	0人（33%）	4人（18%）
	施設	1人（50%）	2人（100%）	4人（66%）	1人（20%）	3人（75%）	2人（33%）	13人（59%）
	進学	0人（ 0%）	0人（ 0%）	1人（17%）	3人（60%）	0人（ 0%）	1人（33%）	5人（22%）